「歴史の空白」終戦時の海軍を長野で探る・・・（その２）

土屋光男（９組）

取り組んで分かったこと

平成 24（2012）年、地域紙の古い記事に、「安茂里の小市のあるお宅に海軍壕を掘った部隊以外に薗田部隊がいた」とあるのを見つけ、当時の安茂里村村長であった塚田伍八郎さんの日記をお借りできました。それから病を経ての６年後、パソコンに入力しておいた日記を思い切って開きました。「万歳！甦った。」そこには三つの新たな史実ともいうべき驚きの記述がありました。

その一つは、海軍壕を掘った第 300 設営隊の、戦時日誌が残っていない期間の小市での実態など。（海軍関係書類は殆ど焼却処分されたという。）

二つ目は捷 36395 と通称される独立工兵第 94 大隊（日記では林部隊）が犀川神社付近外三ヶ所で洞穴を掘っていたことなど。

そして三つめは、横須賀海軍工廠造兵部とも関係ある海軍通信隊薗田（美輝中佐）部隊が塚田元長野市長宅を本部として駐留していたことなど。

令和 1（2019）年には二人の長老を訪ね、翌年には壕の地権者などと「昭和の安茂里を語り継ぐ会」を結成、調査を進め３年余りで次のようなことを解明できつつあります。

三つの部隊（第 300 設営隊・独立工兵第 94 大隊・薗田部隊）の動きはどうも関連があるようで、海軍は横須賀から虎の子部隊、第 300 設営隊を小市に派遣、最高司令部である軍令部（大本営海軍部、1000 人規模）を収容するため壕を掘らせていました。

又、房総半島で米軍の上陸に備えていた林部隊を急遽参謀総長指揮下に入れ安茂里に派遣、掘っていた数本の穴はどうも大本営に関係する（海軍用の）通信施設（送信・受信）としての地下壕だと思われます。更に海軍きっての通信のエキスパートを集めた極秘通信隊、薗田部隊は連日松代に出掛けて「海陸軍共同の中央通信施設」を（象山地下壕など）に設営中だったと推定されます。

従って、海軍も安茂里に司令所などを構築、最後の決戦を叫ぶ陸軍に呼応するべく、その臨戦態勢を整えつつあったと思われるのです。

通説では、大本営移転は「安全のための疎開・避難」とされていますが、松代に拠った陸軍と安茂里に拠る海軍は両軍一体化をも標榜して、長野を舞台に“最後の戦”を目論んでいたと推論せざるを得ません。

現在、“昭和の安茂里を語り継ぐ会”では、海軍壕を正式に「大本営海軍部壕」と呼称し、子供たちと一緒に整備・保存をしつつ見学会を開き、更には長野地域の終戦時の状況を明らかにしようとする、地域挙げての取り組みが行われています。善光寺のある平和都市ナガノは、沖縄と同じか、いやそれ以上の阿鼻叫喚の修羅場に陥り、最悪の場合、三発目の原爆が落とされていたかもしれないのです。

最後に思います。これまでの「松代大本営」という呼び方は一考の余地があるのではないでしょうか。私は「長野大本営」の方が適切だと思うのですが・・・。

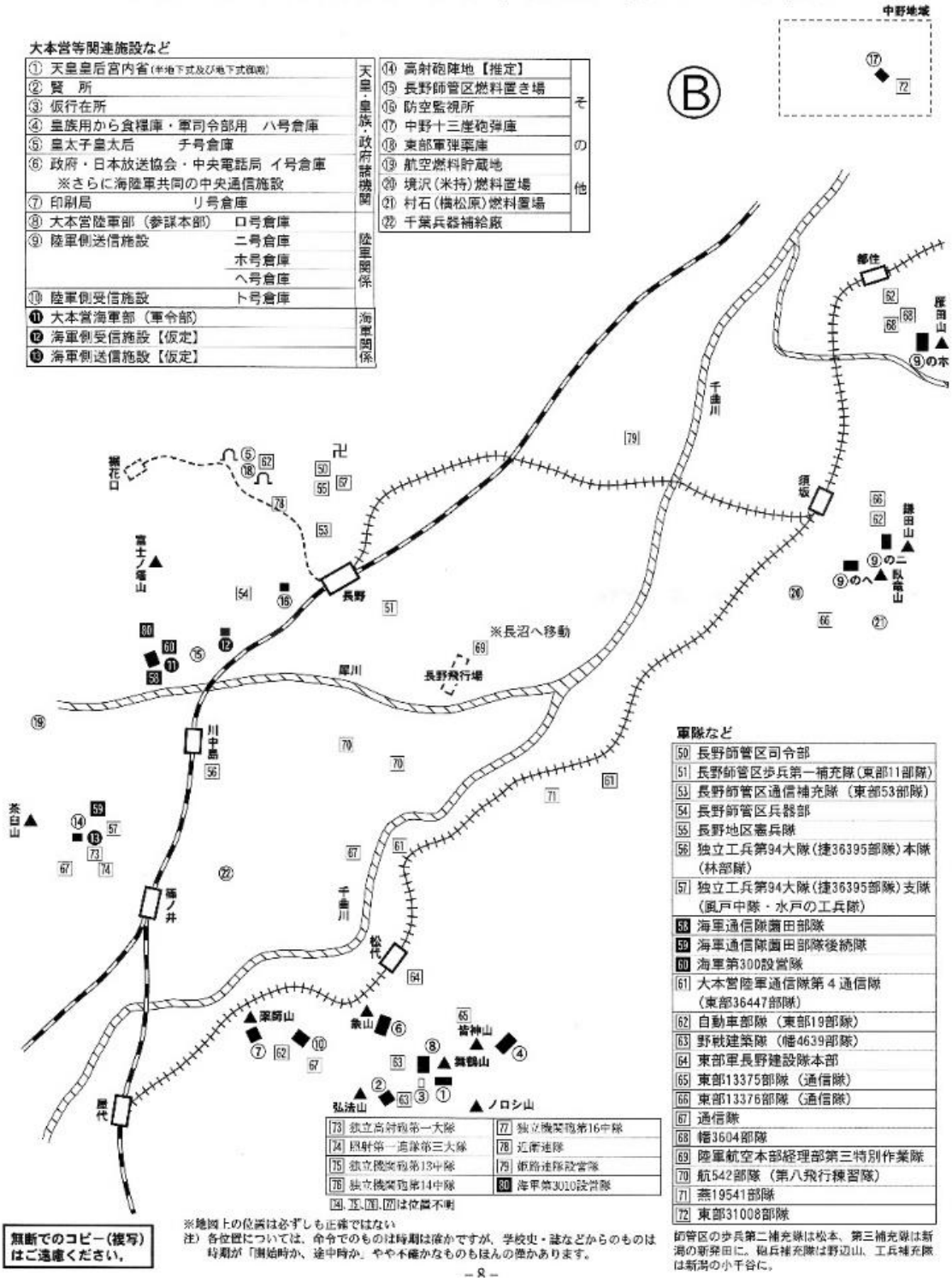
長野(＊)には戦争末期、大本営や国家機関など国家中枢が移転しようとしていました。でもその実態は未だ充分解明されておらず、特に大本営の両翼をなす陸海軍の内、海軍のそれについては公文書等がまったく無く、「歴史の空白」となっています。

それ故、それに関する地域のお年寄りの証言や残された書類などが出てくると、その空白は埋められることになります。皆様の率直なご意見を伺いたいものです。

（＊：”長野“は須坂・中野・千曲と旧長野の範囲を考えています）

【写真１：語り継ぐ会の会員たちと、前列左端が筆者】

【写真２：地元の子供たちに説明する筆者】

（2023 年 1 月 29 日、その 3 に続く）

1945年８月15日（大本営移転予定期日）以降、９月時点（予想）
北信地域の大本営関連地下壕・軍事施設・軍隊などの分布図